

# 和食の無形文化遺産化と日本のアイデンティティー

寛ボルトール（倫理研究所専門研究員）

## はじめに

日本は現在（2013年）、日本食文化を世界の無形文化遺産にしようとしている。より厳密に述べると、日本政府は「和食」がユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に記載されることを目指している。2013年のはじめ、日本政府（文化庁）はユネスコに対し、「和食—日本人の伝統的な食文化」と題した提案書を提出した。日本のこの案件は現在審査中であり、今年末にはアゼルバイジャンで開催されるユネスコ無形文化遺産委員会において一覧表への記載（または却下）が決定される。

「京都祇園祭の山鉾行事」や鹿児島県の「甕島のトシドン」といった地域に根ざした祭礼や行事、また「雅楽」や「浄瑠璃文楽」というような日本古来の伝統芸能など、すでに計21件の日本を代表する伝統文化がユネスコの認定を受けて、無形文化遺産の一覧表に登録されている。しかし今年の案件は、地域的でもなく、また伝統芸能でも祭礼でもなく、且つ日本国民全員が関係する、日常的な日本食文化というものであり、これは日本にとって初の試みでもある。日本は以前、数件の伝統芸能や行事をユネスコに対して無形文化遺産の候補として挙げていたが、ユネスコが本年度より各国から1件のみを審査の対象にすると制限したため、日本政府はその他の伝統芸能の推薦を保留にし、「和食」を最優先案件とすることを、今年春、正式に提案した。日本政府の説明では、日本食文化を優先的にユネスコに推薦したのは「日本再生戦略」の一環であり、国全体を盛り上げさせるためのものという。

登録が成功した場合、実際に和食の無形文化遺産化がどの程度「日本再生」を促進させることになりうるのかについては、のちの重要課題であろうが、現在はまだそれ以前の「和食」が無形文化遺産になる途中の段階にある。当論文においては、そのプロセス、つまり日本食文化が無形文化遺産になる経緯を見ていき、特にこのプロセスによって形成された「和食」から、どのような形の日本文化が世界に向けてアピールされ、また「和食」を通じてどのような日本のアイデンティティーが表現されているのか、考察していきたい。